

## 日本の歴史 24

『戦乱の都・京都：日本の歴史はここで動いた』 柘植久慶著 (PHP研究所 2009年)

本書の請求記号 216.2-Tsu

稲垣 宏行

京都と言えば、まず最初に神社仏閣が建ち並び、伝統ある町並みが思い浮かぶかもしれませんが、本書で紹介されているのは戦乱の都という側面を持つ京都です。

京都では歴史上重要な多くの事件や争いが起きました。例えば、藤原薬子の変、保元・平治の乱、南北朝の動乱、応仁の乱、天文法華の乱、足利義輝と松永久秀、三好三人衆との戦い、本能寺の変、山崎の合戦、宮本武蔵と吉岡一門の決闘、寺田屋騒動、池田屋事件、蛤御門の変、坂本龍馬や佐久間象山の暗殺、鳥羽・伏見の戦いなどが挙げられます。

この中で、まれに見る長期戦となった応仁の乱では、法勝寺、妙法院など多くの寺が焼失したと言われています。また、戦乱時には上御霊神社が開戦地になり、相国寺が細川勝元率いる東軍の拠点にされました。応仁の乱以前から生じていた土一揆の襲撃などに備えて、堀を高くし濠を造る寺社が続出するなど、戦乱への構えを整えていたことが本書に記されています。織田信長が一命を落とした本能寺も、襲撃に対する備えを持った寺であったと言われています。このように多くの寺社が戦乱で失われてしまったという史実は、あまり知られていません。

室町時代後期には戦国大名たちが競って京都を目指していました。彼らは目的を成し遂げ権力を誇示するために、京都にもいくつかの城を建築しました。徳川家康の築城以前に織田信長が同じく二条城として築いていた城や、豊臣秀吉による伏見城、さらに秀吉が築いて自ら破却した聚楽第などもありました。このように安土桃山時代になると、寺を拠点としていた方式から変化して、城郭の持つ威容によって戦乱を平定しようとしていたことが分かります。

勿論、本書はこれらの戦国大名だけでなく、彼らとほぼ同時代に入浴した宮本武蔵や、幕末に登場した新撰組の近藤勇など、事件や争いに関わった人物にも焦点を当てています。それは、

三十三間堂などで吉岡一門との決闘に臨んだ武蔵や、池田屋などに見られる近藤ら新撰組の攘夷派に対する肅正、同じく芹沢鴨の暗殺、さらに新撰組と御陵衛士の伊東甲子太郎らとの闘争を例に関わった事件の流れが説明されています。

彼らが活動した足跡は、今では史蹟という形で残されています。ただ、現在ではすでに消失してしまった建物もあり、それが存在していたことを示す石碑しか残されていないところもあります。幕末期に新撰組に襲撃された池田屋などは、時代の変遷によって失われてしまった例と言えます。

このように京都は江戸時代に入ってから、日本の重要拠点として存在し続けました。これは天皇を中心とした朝廷の存在が大きかったからであります。武家政治の元祖であった平氏やその後の足利氏などは権力を築くために朝廷を頼り、京都に政権を置きました。しかし、それは長続きせず、また、そうして創りあげた政権も早い段階で崩壊の兆候が見られます。その原因の一つは、彼らが朝廷の権力に近づき過ぎていったからだと考えられます。これに気づき、京都から距離を置いたのが源頼朝や徳川家康でした。しかし、彼らとて京都と朝廷をないがしろにするわけには行かず、この地にも幕府の拠点を置き重要な人物を配しています。

こうして見るように、歴史的に見て京都は多くの人々を招き寄せ、時にはそれが元で事件や争いが起こりました。今日を生きる私たちにとって、前述の歴史を知っておくことは必要だと思います。戦乱の時代であった京都に目を通すことで、我々の持つ京都のイメージがより重厚になるためです。さらに、彼らの戦いを思い出し経緯を再考することによって、我々が希求する真の平和に少しでも近づくものと信じているからです。

いながき ひろゆき(司書・係・情報サービス課)